



紙と一緒に

テリー伊藤

つい最近、玩具メーカーが発表した調査結果を見ると、「子どもがいちばん好きなおもちゃはぬいぐるみだ」といって、どんなにおもちゃのハイテク化が進んでも、ぬいぐるみと寝食をともにすることだけは減っていないのだ。

そんなふうに、「そばにぬいぐるみがいると安心する」というのは、子どもばかりではない。私の周りにいる女性たちの中にも、いまだにぬいぐるみと一緒に寝ているという人が少なくない。

で、私の場合、ぬいぐるみに代わるのが、紙とボールペンである。二十四歳でテレビ業界に入ってから、私は毎晩、便箋とボールペンと一緒に寝ている。眠りにつく前、夜中に目が覚めたとき、朝起きたとき、思いついたことを忘れないようにメモしておくためだ。

ぬいぐるみであれば出かけるときに携帯できないこともあるだろうがこの便箋とボールペンは、どんなときでも私のそばから離れることがない。仕事るときはもちろんだが、プライベートな外出のときでも、私はそれを肌身離さず持つこと。

とくに二十七〜二十八歳のころはそれこそ二十四時間、湯水のようにいろんなアイデアが頭に浮かんできたので、そのたびにすぐに便箋にメモを書きまくった。映画を見るときでも、ひざの上我便箋を置いた。そうしておかないと、いつ何を思いつくかわからないからだ。

デートのときもそうだった。彼女と喫茶店に入ると、まずカバンから便箋とボールペンを取り出してテーブルの上に置く。いきなりそんなことをする私を見て、彼女は最初、「なに？この人？」とツツクリしていたが、私はそうしないと不安なのだ。いわば便箋とボールペンは、私の精神安定剤なのである。

ミュージシャンならば、彼女と二人でいるときにギターを抱いてポロロンとつま弾くところだろうが、私は白い便箋、間が持たなくなるまで、魚の絵や車の絵を



テリー伊藤(てりー・いとう)
1949年東京生まれ。日本大学芸術学部卒業。番組制作会社「IVSテレビ」入社。その後独立し、テレビ東京「ASAYAN」を総合演出するようになる。著書は「お笑い日中戦闘宣言!」(共著)、「格闘技心中」(共著)など多数。

描いてそれを彼女に見せて遊んでいた。そうやって遊んでいるうちに、またいろんなアイデアが浮かんでくる。それをまた簡潔書きにする。そして、それが一本のテレビ番組になっていく場合もある。

もし私が何かの能力があるとしたら、それは落書きする能力ではないかと思っている。絵がうまくいなくてもいいし、文章能力があるわけでもない。ただ、こうやって便箋に絵や文を落書きする能力だけはあってもいい。

頭に浮かんだアイデアというのは、点だ。それを落書きしながら絵にしたり文にしたりしているうちに、「線」になっていく。頭に浮かんだ段階では整理できていないことが、紙に書いているうちにどんどん整理されてきて、やがてそれが作品という形になっていくわけだ。

駆け出しのテレメンだったころからいまに至るまで、この習慣はまったく変わっていない。おそろしく、これからも変わらないだろう。白い紙以外に私が落書きする場所はどこにもないのである。

PAPER COLUMN Vol.4

軽く、強く、美しく...

新聞用紙の進化には目覚ましいものがあります。

まず、軽くなりました。この20年間でほぼ2割も軽量化。これにより輸送は大幅に効率化され、配達員さんたちの負担もずいぶん軽くなりました。

しかも、とても強くなりました。毎分600mを超えるスピードで動く輪転印刷機にかけても、紙切れを起こすのは地球半周以上の長さ(27,300km)にたった1回程度です。

環境に優しいのも特徴です。新聞用紙は、原料の半分以上が古紙できています。

さらに、表面をキレイにするために薄くデン

ブンが塗られているので、印刷も美しく仕上がります。

軽く、強く、優しく、美しい...日本の新聞用紙の製造技術は、まさに世界一と言えるでしょう。



写真提供:朝日新聞社

